

テーマ	「友情のかべ新聞」の学びを自律的な読書につなげる試み ～解釈読みと評価読みから「読みの方略」を明らかにして～
発表者 (所属)	岡 賢一（三重大学教育学部附属小学校）
【発表概要】 1. 研究の背景と目的 本学級児童は、読書に義務感や拒絶感を抱いている様子が窺える。これは選書の心理的ハードルの高さや、目的の曖昧さという「学びのバリア」に起因する。 そこで本研究では、4年国語科教材『友情のかべ新聞』のミステリー仕立ての特性に着目する。物語の謎を解く「解釈読み」と、表現方法や論理を吟味する「評価読み」を通して「読みの方略」を自覚化させ、環境・目的・指導をUD化する。これにより、読書に向かわない児童を含めた全員が、主体的に読み進める「自律的な読書」へと向かう手立てを検証する。 2. 具体的な手立て 本単元では、以下の3つの場面をデザインする。 ① 環境のデザイン：教室内に「ミステリー」「友情」をテーマにした並行読書用の特設コーナーや、新聞の作り方等の「教養本」を配置する。 ② 目的のデザイン：単元のゴールを「学校みんなにおすすめしたい本を紹介するポップを作って図書室に掲示する」と設定し、他者貢献による目的の明確化を図る。 ③ 指導のデザイン：「挿絵からの展開予想」や「伏線のつながり」といった『読みの方略』を学級で共有する。その方略を使って並行読書の本を読み、友達と話し合う場を設定する（「習得＋活用」構造での単元デザイン） 3. 期待される効果（計画段階における仮説 第4学年C組を対象に2026年10月に実践予定。 児童のポップ、意識アンケート、行動観察から変容を見取る。明確な方略と目的を持つことで、強制されずに主体的に読書に向かう変容プロセスの構築を目指す。発表では、その実践の具体及び、成果と今後の課題について報告する。	